

平成27年度 普及活動成果集

めざせ！！ 元気な担い手 もうかる農業




産地づくり
(ブランド)



人材づくり

経営体づくり



 福岡県飯塚普及指導センター
平成28年3月

はじめに

平成 27 年は 4 月前半の多雨、5 月の高温、長引いた梅雨による曇りや雨、平年より 10 日遅い梅雨明け～8 月中旬までの高温、8 月中旬～9 月中旬までの長雨による低温と日照不足、10 月は回復したものの 11～12 月は高温、多雨、寡照とエルニーニョ現象を受け、気象が大きく変動した年でした。

農業を巡る国際情勢は TPP 調印等大きく変わる中、国の農政も農地中間管理事業を始めとする「4 つの改革」が進められ、日本農業は大きな渦中の真っ只中です。また、経済情勢は原油価格が大きく変動する中、資材価格の高止まりが続き、今後の農業経営にとって大きな制約要因となっています。

飯塚地域は福岡・北九州都市圏に隣接した交通の要所で、古くから良食味米、野菜、花き、果樹、畜産等を生産する多様な農業が営まれています。しかし、他の地域に比べても農家数の減少と高齢化は一層進み、担い手の確保、個別農家や営農組織の農地集積及び経営力の強化が急がれます。一方で、新規就農者や担い手の法人化は少しずつ増え、農産物の 6 次産業化に取り組む農家や組織も出てくるようになり、これらの農産物や加工品を直売所に出荷するなど多様な販売を力強く展開するようになっていきます。

このような情勢の中、当普及指導センターでは、「県農業・農村振興基本計画」に沿って、平成 27 年度はさらに地域農業の担い手確保やブランド産地の構築のための普及活動を強化してまいりました。活動アローカンを「いばざせ!!!」元気で担い手・きょうがら農業」として、「大ぼろぐり」、「営農体づくり」、「ブランド産地づくり」という 3 つの「づくり」を重点活動目標に職員一丸となって地域農業の振興に取り組みました。

この成果集は、農家や関係機関等の方々に広く普及指導センターの活動を理解していただくために、平成 27 年度の主な活動成果を取りまとめたものです。地域農業の振興と農家の方々の経営改善の一助になれば幸いに存じます。

平成 28 年 3 月

飯塚農林事務所飯塚普及指導センター
センター長 尾形武文

目 次

1 平成 27 年度気象・農業生産の概況

- (1) 気象概況・気象災害・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
- (2) 農業生産の概況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

2 普及活動の主な成果

- (1) 農業を支える女性農業者の育成・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
- (2) 園芸農業における企業的経営体の育成・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
- (3) 水田農業の担い手の育成と体質強化・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
- (4) 飼料用米の安定生産と品質の向上を目指して・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
- (5) イチゴの安定生産による産地強化・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
- (6) 冬春出シトルコギキョウの生産拡大・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
- (7) 「とよみつひめ」の面積拡大および施設化による産地強化・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
- (8) 未来にのこそう「筑穂牛」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
- (9) トピックス・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16
- (10) 各種表彰（国・県）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19

3 参考資料

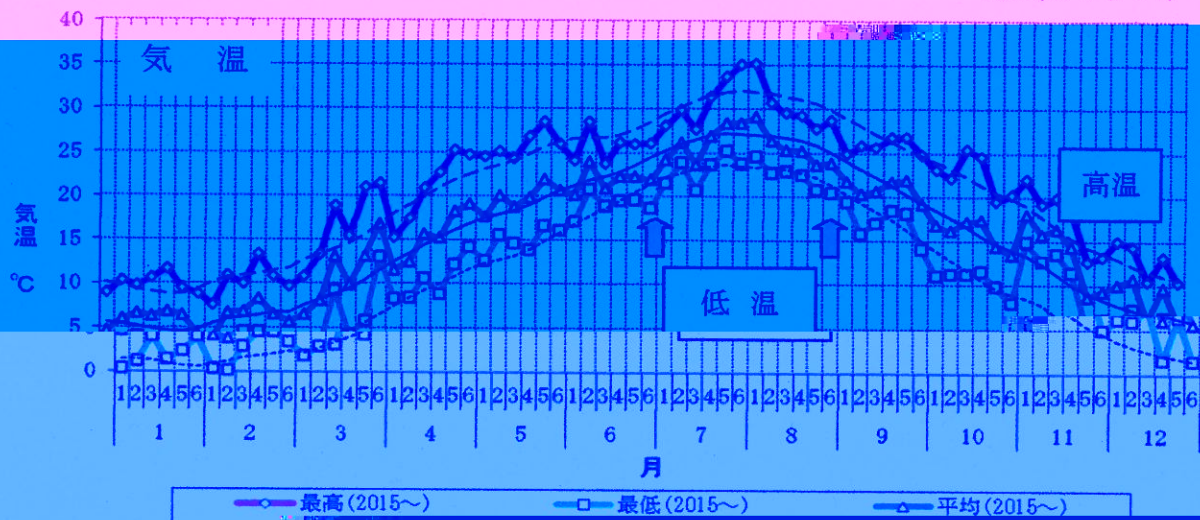
- (1) 普及指導センターの活動体制・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22
- (2) 現地実証・展示ほ一覽・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23
- (3) 現地活動情報一覽・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25
- (4) 普及指導員調査研究一覽・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27
- (5) 飯塚地域担い手・産地育成総合支援協議会活動実績・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・28

1 平成 27 年度気象・農業生産の概要

(1) 気象概況

平成 27 年度の気温は、3月中旬から4月上旬は平年より高く経過、6月下旬から7月中旬、8月中旬から9月中旬の期間は記録的な低温となり、11～12月は高く経過しました。特に、8月中旬から1ヶ月は長雨の影響で降水量は極端に多くなり、記録的な日照不足となりました。

(飯塚アメダスデータ)



<気象災害>

本年は、6月初めから7月中旬にかけて梅雨前線が停滞するとともに、台風が連続して接近し、低温・日照不足となり、水稻を中心に作物の生育に影響しました。さらに8月中旬～9月中旬も長雨・低温・日照不足が続き、特に8月25日に福岡県内を縦断した強力な台風15号は激しい風雨を記録し、農業生産にも大きな被害を与えました。

飯塚普及指導センターでは台風の接近時や被害発生時には、技術対策情報を生産者や関係機関あてに発信し、災害発生の軽減に努めました。

なお、今年度発生した気象変動による主要な災害は以下のとおりです。

表1 主な被害状況

時期	種類	主要な災害・影響
3月25～26日	晩霜	被害報告なし
5月12日	台風6号	被害報告なし
6月初旬 ～7月中旬	長雨、日照不足 (累計雨量 237.5mm)	生育が軟弱徒長となり水稻で葉いもち病多発
7月17日	台風11号	強風により、早期水稻中心に籾ずれ発生
7月26日	台風12号	直接の被害報告なし。長雨・日照不足が長期化
8月中旬 ～9月上旬	長雨、日照不足 (累計雨量 387.5mm)	水稻:登熟不足、収穫遅延 秋冬野菜:定植遅れ
8月25日	台風15号 (最大瞬間風速 31.4m/s) (最大1時間降水量 56mm/hr)	<ul style="list-style-type: none"> ・水 稲:倒伏、籾ずれ発生～490ha ・飼 料 米:倒伏～230ha ・大 豆:倒伏～190ha ・露地野菜:倒伏、茎葉破損(ナス・キュウリ・レンコン)～4.5ha 施設野菜:ビニル破損(イチゴ、アスパラガス)～50a(6件) ハウス倒壊(イチゴ、軟弱野菜)～6.5a(2件) ・露地果樹:落果、落葉(カキ・リンゴ・ナシ)～26ha 施設果樹:ビニル破損(ブドウ、イチジク)～70a ・露地花き:倒伏、茎折(キク、シンテツポウユリ、ケイトウ)～157a 施設花き:ビニル破損(トルコギキョウ、キク)～20a(4件) ・畜 産:畜舎等施設破損～6件
10月1日	強風雨	水稻:倒伏～10ha

※温度や風速の数値は全て飯塚アメタスデータを利用

※被害面積・件数は普及指導センター調べ

(2) 農業生産の概況

<普通作>

○長雨・日照不足の影響で低収量であった水稻

早期水稻は田植後、気温が高く経過して、初期生育は順調で茎数も多くなりました。

6月27日の梅雨入り後、降雨の日が多く、日照不足で気温も低く推移したため一部地域で葉いもち病が多発しました。出穂期は、初期生育が進んだため昨年と比べ2日程度早くなり、7月29日の梅雨明け以後は、極端な高温で推



移したことにより収穫期も昨年より2日程度早く

なりました。収量は、平年並みからやや多くなり、品質もおおむね良好でした。

普通期水稻については、梅雨入り～7月下旬までの気温は低く、日照時間も少なかったため、茎数はやや少なく、軟弱徒長気味の生育で、葉いもちも多発しました。



葉いもち病の発生状況

梅雨明け以降2週間は、極端な高温で、好天の日が続き生育は急速に回復しました。出穂は昨年より1～2日程度早くなりましたが、8月中旬以降の長雨・日照不足の影響で、収穫期は平年より3～5日程度遅くなりました。収量は、登熟不良と穂いもちのため、平年より少なくなりました。特に、穂いもち多発地域では2割程度の減収ほ場も見られ、大きな被害となりました。品質は、日照不足、いもち病による充実不足がみられましたが、元気つくしやヒノヒカリの1等米比率は高く、平年並みとなりました。

○冬季の低温と多雨により不作だった麦(平成26年播種)

播種作業は、11月上旬から始まりましたが、降雨の影響と飼料用米や大豆の収穫が遅れ12月上旬がピークとなりました。12月～1月上旬にかけて、気温が平年に比べてかなり低く経過したことから、出芽や生育の遅れが見られました。また、1～3月までは降雨が多く、麦踏み・土入れ等中間管理が不十分なほ場が多く、日照不足も重なり草丈は低く、茎数も少なくなりました。3月以降は気温の上昇に伴って生育は回復し、出穂期は平年より5日程度早く、成熟期は平年より7日程度早くなりました。収量は、穂数が少なく、3月以降の多雨の影響で充実不足となり、平年の70～85%と非常に低くなりました。品質についても充実不足の影響で、平年に比べ低くなりました。

○長雨・日照不足と台風の影響により不作だった大豆

播種作業は6月29日から始まりましたが、その後の断続的な降雨により中断され、本格的な播種は梅雨明け直前の7月27日頃からと非常に遅くなりました。播種後の激しい降雨による土膜(クラスト)の形成で、出芽不良が発生し、一部では播き直しも行われました。8月中旬以降は降雨が多く、中間管理が出来ず湿害や雑草害が多発しました。開花期は平年より2日程度遅れ、開花期前後の8月25日に台風15号が直撃し、6月末～7月上旬播種で倒伏した他、

葉の裂傷や落花が見られました。その後も、9月中旬までの食雨により、着莢数は少なくなりました。9月中旬以降は好天の日が続き、気温も高く経過したことから乾燥及び着莢数が少ないことが原因と思われる莢先熟のほ場が多くみられました。収穫は、11月8日から始まりましたが、降雨の影響で進まず、12月末まで続きました。収穫量は、播種の遅延や台風・長雨の影響により莢数が少ないことで、非常に低く品質も中粒中心となりました。



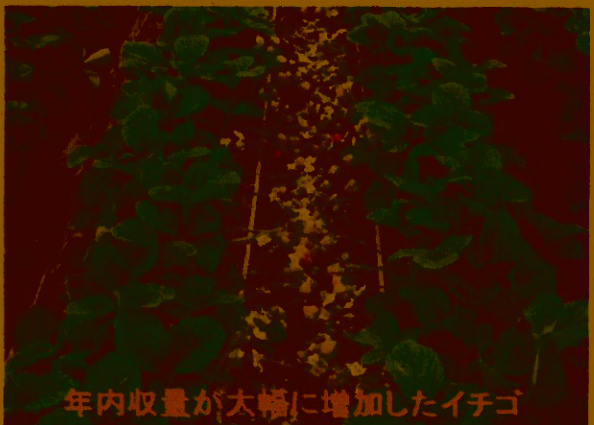
台風による大豆莢の裂傷

<野菜>

○暖冬の影響で、年内の収量は前年比 130%となったイチゴ

育苗期間中は、8月盆開けからの日照不足および台風 15 号の接近により株冷苗の陽光処理が十分にできず徒長気味の生育となりましたが、積極的な施肥を行ったことで前年並みの苗が育成されました。

定植後の生育は、10月の気温が比較的良かったため、2番花の花芽分化は順調でした。11月の気温は記録的な高温となり、また12月以降暖冬傾向で推移したことから、年内収穫が前進しました。



年内収量が大幅に増加したイチゴ

○暖冬で価格低迷に泣かされたブロッコリー

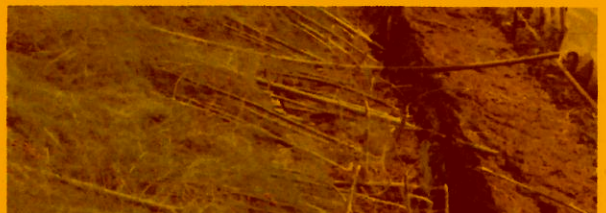
育苗は、盆明けからの降雨や台風 15 号の影響によりべと病の発生が多く、播き直しや苗の充実不足が多くみられました。また、定植は降雨のため10月下旬まで遅延しました。

定植後は、適当な降雨もあり生育は順調でした。早生品種の定植が遅れたことにより、11月の出荷量は少なくなりましたが、暖冬傾向で推移したことから生育が進み、出荷が集中したため12月を中心に価格が低迷しました。

年明け後は出荷量が減少し、寒波による生育遅延などの影響で需給が調整され堅調な価格で推移しました。

○異常気象の中で踏みとどまったアスパラガス

前年秋の気象および斑点性病害の多発が影響して貯蔵根への養分蓄積が十分でなく、早めの立茎開始となりました。5月は気温が高く立茎が順調に行われました。夏芽の本格的な収穫時期である6月上旬～7月下旬は低日照、梅雨明け(7月29日)後～8月中旬までは高温多日照、一変して8月中旬～9月下旬は日照時間が少なくなるなど異常気象が続きましたが、この間の出荷量



台風によるアスパラガス親茎の倒伏

はほぼ前年並みのペースで推移しました。10月に入って最低気温が低い日が多く、例年になく出荷量が減少しました。収穫終了後の11月以降は例年になく最低気温が高く、茎葉の黄化が遅れました。

<花き>

○台風被害もあったが、単価は安定していたキク

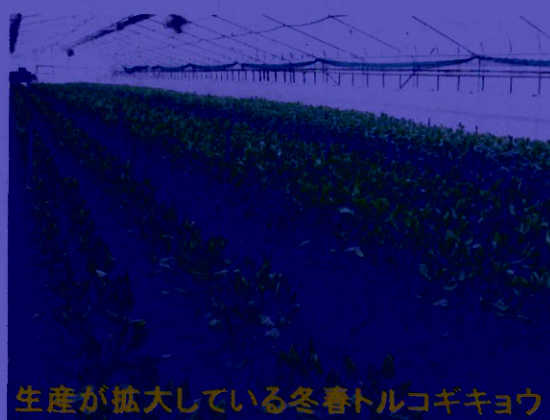
5月下旬～6月上旬の高温・乾燥により花芽分化が急ぎ、8月の盆用の出荷時期が早まりました。6月中旬～7月中旬にかけては低温、低日照が続きましたが、白さび病の発生は昨年より少なく、ハダニやヨトウガ等の害虫被害も少となりました。

本年は梅雨末期の大雨もなく、キクにとっては概ね順調な気象条件で推移しましたが、8月25日の台風15号直撃以降は低温、低日照が顕著となり、9月彼岸にかけて白さび病等の病害も発生し厳しい生産状況となりました。

このような生産環境でありましたが、病虫害防除や肥培管理の徹底によりJA共販量はやや増加、単価の増減端は落さず、販売は好調でした。

○11月に出荷が集中した秋出しトルコギキョウ、生産が拡大している冬春出しトルコギキョウ

秋出しトルコギキョウは、定植時(7月下旬～8月上旬)は高温、高日照となり、初期生育はやや急いだものの順調な生育となりました。8月中旬以降低温、低日照で経過したため、生育は全般的に遅れ気味となりました。収穫期もやや遅くなり、出荷最盛期は11月中旬からとなりました。品質は、チップバーンやブラスチングの発生も少なく、良好でした。共販量は587,000本で、単価は10月の高騰後、11月に暴落するなど乱高下が激しい販売状況でした。

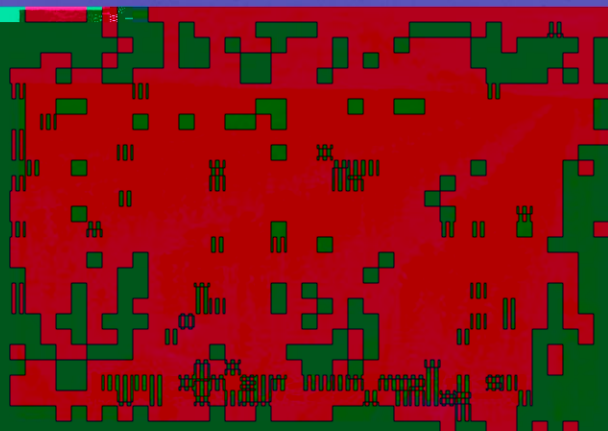
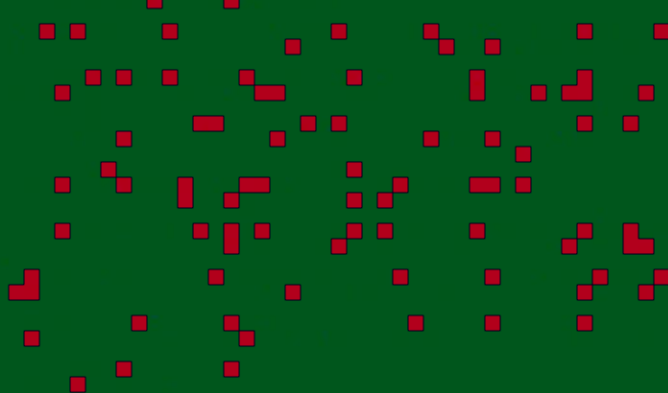


生産が拡大している冬春トルコギキョウ

一方、冬春出しのトルコギキョウは、9月中旬～10月上旬に定植し、3～4月に出荷する作型で、1～2月の栽培夜温を低温とする低コスト栽培となっています。生産者数は11戸で生産面積が拡大しています。

○順調に生育し販売量が拡大したシンテツポウユリ

JAらくおか専種では、16名がシンテツポウユリ



<果樹>

○雨による減収を単価で補ったブドウ

トンネル、露地栽培では発芽・展葉は前年並で、開花期は前年より2日早くなりました。開花期の天候は良好でしたが、単為結果が多く見られました。着色は、加温栽培では良好でしたが、トンネル、露地栽培では着色期の日照不足によりやや不良となりました。加温・無加温栽培では収穫期の裂果、露地ではべと病、晩腐病の発生や台風15号被害により、出荷量は対前年比81%、単価は対前年比118%となりました。

○気象災害に泣かされたナシ

開花期は前年より「豊水」で2日遅く、「幸水」では昨年並みでした。開花期の低温や降雨により「豊水」「新高」を中心に結実不良となりました。果実肥大は、全体的には良好でしたが、種入りが悪かったため肥大がバラつきました。「豊水」では、みつ症や変形果が多くなりました。病害では、4月上旬の降雨と



による落果被害も発生しました。そのため、出荷量は対前年比38%となり、販売金額は対前年比47%と大きく落ち込みました。

○高単価で減収を補ったカキ

発芽、展葉などの初期生育は、3月下旬の高温により前年並みで平年よりは5日早くなり、4月下旬以降の高温により、満開期は前年より3日早くなりました。「富有」の含核数は平年並みで、結実は良好でした。8月の台風とその後の降雨により炭そ病が多発しました。8月以降の雨と秋季の高温により、果実の肥大は良かったものの、生理障害が発生し樹上軟果が多く発生しました。着色が早く生果の出荷量は増えましたが、主力の冷蔵カキは大玉比率は高かったものの減収となりました。カキの出荷量は対前年比89%となりましたが、単価が良かったため、前年並みの販売金額となりました。

○施設栽培で持ちこたえたイチジク

露地栽培では、凍霜害の影響で発芽不良や初期生育の遅延が発生しました。また、収穫期は8月中～下旬の長雨・低温・日照不足、台風の直撃により腐敗果や傷果、疫病が多発し減収となり、果実品質の低下も目立ちました。一方で、施設栽培では、低温や日照不足の影響を受けながらも、霜や降雨による被害がほとんどなく、比較的安定した出荷となりました。



安定出荷だった
施設イチジク

<畜産>

○厳しい経営状況の中、新たな経営戦略に取り組む肉用牛

肥育経営では、~~平均~~単価は上昇傾向にありましたが、肥育素牛の記録的な高騰と購入飼料の高止まりにより経営は厳しい状況が続いています。

そのような中、新たな経営戦略として精肉の直売や地域ブランド牛を使った加工品開発等、6次産業化に取り組む農家も現れました。

繁殖経営は飼養戸数 23 戸と前年と変わりませんが、飼養頭数は727頭と増加しました。子牛の市場価格は引き続き高値で推移しています。



○自給飼料の利用が進む酪農

飼養戸数は46戸から45戸、飼養頭数は1,977頭から1,855頭と減少したことで、生乳出荷は前年実績10,783tに対し、27年は10,303tと減産しました。

飼料価格の高止まりが続く中、飼料コスト削減のため、河川敷での自給粗飼料生産及びWCS用イネの利用が進められています。

生産基盤の強化を図るため、自家育成による後継、生確保への意識が高まっており、雌雄判別精液を活用した計画的な自家育成牛の確保が進められています。



2 普及活動の主な成果

(1) 農業を支える女性農業者の育成

～ “農家でよかった” と思える女性たちの育成～

○背景

農業経営発展のためには、女性農業者が農業経営に参画し、女性ならではの視点や能力を活かしていく必要があります。そのためには、農業に必要な知識や技術の習得が重要であり、研修会等を開催していますが、対象者の拡がりが少ない現状にあります。

そこで、若手の女性農業者の発掘とリーダー育成に向けた支援を行いました。

○対象概況

①概ね45歳以下の若手女性農業者（認定農業者のパートナー、青年就農給付金（開始型）共同申請者）79人、②女性認定農業者16人、飯塚地区農村女性グループ員47人（うち女性農村アドバイザー13人）

○活動内容

①の対象者は、概ね45歳以下を中心にリストを作成しました。このリスト掲載者に対して、経営参画に必要な技術や経営の基礎知識の研修会開催や各種研修会への参加呼びかけを行いました。また、②の対象者には、実践研修や経営力向上講座等の開催、経営参画への意識づけを図り、女性農業者の活躍促進による農業経営発展への支援を行いました。さらに、新たに次世代農業を担う若い女性農業者の発掘を行うため、JA生産部会や青年部及びその配偶者への実態調査を行いました。



写真1 流通加工研修



写真2 6次産業化先進地視察



写真3 経営ビジョン策定研修

○成果

概ね45歳以下の女性農業者

(2) 園芸農業における企業的経営体の育成

～家族経営から雇用型経営・法人経営への転換を支援～

○背景

園芸農業における経営改善では、経営規模拡大や家族の高齢化等により、労働力の確保が課題となっています。

これまで、常時雇用の導入支援により、雇用型経営体数は増加しています。さらに安定した永続性ある経営体を目指すためには法人化へのステップアップが必要ですが、管内の園芸農業の法人経営体はわずかで、今後の支援が課題となっています。

○対象概況

認定農業者 220 経営体(うち雇用型経営 71 経営体)

認定農業者 220 経営体(うち雇用型経営 71 経営体)

(3) 水田農業の担い手の育成と体制強化

～集落営農組織の新規育成と法人化の推進～

○背景

水田農業の維持・発展のためには、担い手の育成が非常に重要な課題となっています。管内は、個別大規模農家の他、集落営農組織が重要な担い手として活動しており、米・麦・大豆を中心とした土地利用型作物の経営を行っています。

しかし、担い手の明確でない地域や米価の下落によりコスト低減を図る必要がある地域などでは、新たな組織の立上げが必要となっています。また、既存の集落営農組織では、コスト低減や経営の多角化、永続性の確保のために法人化が重要な課題となっています。

○対象概況

集落営農組織 53 組織(農業法人 12 組織)

○活動内容

飯塚地域担い手・産地育成総合支援協議会担い手育成部会（事務局：普及指導センター）を中心に担い手の育成支援に取り組んでいます。

協議会では、担い手の明確化のために担い手マップを作成するとともに、育成する集落営農組織の経営モデルを作成しました。これらをもとに、重点支援地域を設定して、集落座談会の開催やアドバイザー派遣事業等を活用して、集落営農組織の設立及び法人化を推進しました。また、集落営農組織の情報交換による経営改善や法人化を目的として交流研修会や先進地視察研修会を開催しました。

○成果

本年度は、新たな集落営農組織が直方市、嘉麻市、桂川町で3組織設立されました。

また、集落営農組織の法人化が進み、直方市で1組織、宮若市で2組織が法人化され農地中間管理機構を通じた農地の集積も進められています。また、来年度の集落営農組織の設立に向けて嘉麻市、宮若市2組織が、法人化については、宮若市、飯塚市、嘉麻市、鞍手町の5組織が検討を始めています。



写真1 集落営農組織視察研修会

表1 集落営農組織数と法人化組織数

	25年度	26年度	27年度
集落営農数	53	53	56
法人組織数	10	12	15

○今後の取り組み

今後とも関係機関と連携しながら、水田農業の担い手育成を推進していきます。

(4) 飼料用米の安定生産と品質の向上を目指して

～ミズホチカラの作付推進と採種組合設立による安定生産体制の確立～

○背景

J Aふくおか嘉穂の飼料用米生産は平成22年から始まり、新たな戦略作物として不作付地の有効利用、麦単作地帯の二毛作、湿田など大豆不適地を中心に作付を拡大し、県内2位の栽培面積となっています。

栽培面積の拡大に伴い、優良種子の安定的確保が緊急の課題となり、さらに実需が望む高タンパクで高品質な飼料用米生産技術の確立が求められています。

○対象概況

生産者 171 名、栽培面積 275ha

○活動内容

良質な飼料用米生産のため、まず、昨年大きな問題となった「稲こうじ病」対策に取り組みました。稲作情報の全戸配布、栽培講習会の実施等により、飼料用米生産者全員に出穂20～10日前の薬剤散布を徹底しました。

また、実需者からは玄米タンパク質含有率確保が要望されているため、緩効性追肥肥料を2回目の追肥に施用した施肥改善実証ほを設置し、栽培改善を検討しました。

さらに、面積の拡大に伴い、優良種子の安定的確保に向けた採種組合の立ち上げを支援しました。

○成果

「桂川町種子生産組合」が構成員7人で設立され、2.5haの採種ほが設置されました。来年度J Aふくおか嘉穂管内約300ha分の種子が確保でき、採種から集出荷までの体制が確立されました。稲こうじ病は圃場で越冬した菌核から伝染するため防除が難しい病害ですが、昨年度発生した圃場での発生量が減少しました。



写真1 採種組合雑穂めき

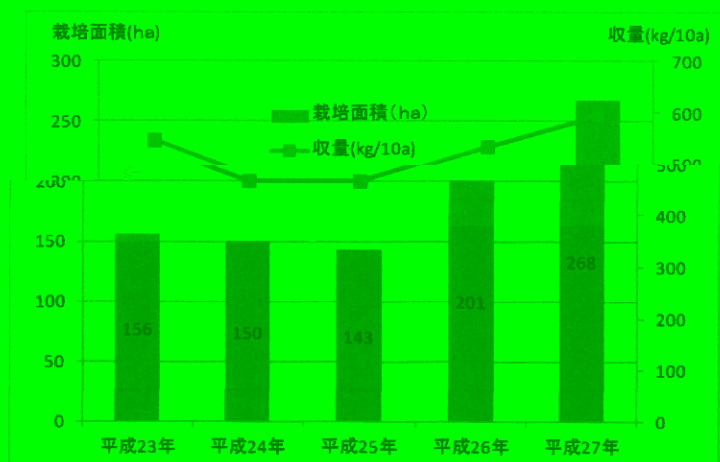


図1 J Aふくおか嘉穂ミズホチカラ面積と収量の推移

○今後の取り組み

飼料用米の交付金は数量払いのため、収量の確保が重要です。引き続き、普及指導センターは、関係J Aと連携しながら、高品質、高収量な飼料用米生産を支援します。

(5) イチゴの安定生産による産地強化

～クラウン径の大きい良苗確保による厳寒期の収量向上～

○背景

J Aふくおか嘉穂、J A直鞍の両イチゴ部会では、高単価が見込める3月までの収量を上げるため、早期作型における「良苗の生産」「活着までの管理」「ハウス内の昇温抑制(活着促進・2番果房分化対策)」の3課題に取り組んできました。

また、近年、土壌病害のイチゴ萎黄病が増えており、栽培上の大きな問題となっています。

○対象概況

J Aふくおか嘉穂イチゴ部会	49戸	8.2ha
J A直鞍イチゴ部会	28戸	6.7ha

○活動内容

早期作型に適する大苗作り、定植後の全面かん水の徹底を呼びかけるため、J Aと連携して講習会、現地検討会を行ってきました。また、近年増加しているイチゴ萎黄病対策を確立するため、クロルピクリン3剤（フロー剤、錠剤、液剤）および土壌消毒用フィルムの現地検討会を開催しました。

○成果

ランナーの切り離し時期を早め、積極的に施肥することにより、クラウン径10mm以上の充実した苗を育成した生産者の割合は、定植時点でJ Aふくおか嘉穂で38.8%（平均9.7mm）、J A直鞍で40.9%（平均9.7mm）と増加し、生産者の大苗づくりに対する意欲が高まりました。また、3月までの収量も毎年増加しています。

萎黄病現地検討会では、3剤とも菌密度0に抑えることができ、今後の普及が期待されます。

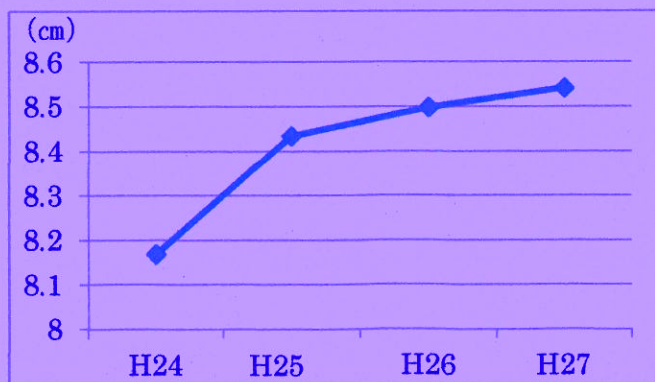


図1 8月上旬におけるクラウン径の推移



写真1 イチゴ萎黄病対策現地検討会の様子

○今後の取り組み

引き続き、早期作型に適する大苗づくりを支援するとともに、萎黄病対策として、土壌消毒を徹底していきます。

(6) 冬春出しトルコギキョウの生産拡大

～県内一のトルコギキョウ産地をめざして～

○背景

管内施設花きの生産は、キクやトルコギキョウを中心にダリア、ユリ、アスターなど多様な草花が栽培されています。主力品目であるトルコギキョウは、10～11月に出荷する「秋出しトルコギキョウ」が主体で、1～5月に出荷する「冬春出しトルコギキョウ」は冬場の管理が難しく冬季安定生産に向けた技術確立が課題でした。そこで、普及指導センターでは、平成23年に(独)花き研究所が開発した低コスト冬季生産技術を実証し、「冬春出しトルコギキョウ」の生産拡大を図りました。

○対象概況 冬春出しトルコギキョウ生産者 10戸

○活動内容

冬季作型では低日照によるプラスチック（花芽枯死）の発生や長期間の加温による暖房経費の負担が課題となっていました。そこで、①長日処理や生育ステージに合わせた低コスト温度管理、②整枝・摘蕾作業の徹底、③低温開花性に優れる品種の選定を進め、冬季低日照期に安定開花させる技術の普及に取り組みました。また、燃油高騰や消費低迷により単価の伸び悩んでいたキク生産者に、転換品目として「冬春出しトルコギキョウ」を推進し生産拡大を図りました。

○成果

徹底したプラスチック対策と低コスト栽培の実証により冬季低日照地域である飯塚地域においても、冬春出しトルコギキョウの安定生産が可能になりました。10a当たり出荷本数は21,420本(H24)→23,060本(H27)に増加し品質も向上しました。また、平成25年以降キクから冬春出しトルコギキョウへ品目転換を行った生産者は3戸増加し、生産面積は177a(H24)→215a(H27)に拡大しました。



写真1 細やかな整枝作業の様子



写真2 冬春出しトルコギキョウの栽培風景

○今後の取り組み

冬春出しトルコギキョウの更なる低コスト安定生産技術の向上と産地ブランドの確立を図ります。

(7) 「とよみつひめ」の面積拡大および施設化による産地強化

～イチジク1億円産地をめざして～

○背景

飯塚普及指導センター管内は、県内有数のイチジク「とよみつひめ」の産地で、今年のお面積が拡大している、非常に活気のある産地となっています。

当普及指導センターでは、JAと連携し、飯塚地域特有の冬季の厳しい寒さ対策と、梅雨や秋雨による品質低下を軽減するための施設化を推進してきました。一方で、施設栽培では夏季の高温等で成熟異常果が問題になっていました。このため、「とよみつひめ」の産地拡大、収量、品質向上による経営の安定のため、平成25～27年度の普及課題として取り組みました。

○対象機関（平成25年当時）

JA直轄いちじく部会（とよみつひめ）	28戸 1.8ha
JAふくおか嘉穂いちじく部会	35戸 4.9ha
合計	63戸 6.7ha（うち、施設栽培面積の合計16a）

○活動内容

産地構造改革計画の重点課題として「とよみつひめ」の面積拡大を取り上げ、①広報活動や、②新規栽培希望者向け説明会の開催、③個別現地診断による積極的な導入推進を行いました。また、新規に「とよみつひめ」を導入して1～2年目の生産者を対象に、経営の早期安定を目指して、重点的な個別栽培指導を行いました。

施設栽培の推進では、施設導入のメリットやコストをまとめたモデル資料を作成し、説明会や作型別の講習会等を開催しました。また、施設化によって顕著になった夏季の高温等による成熟異常果の発生を軽減するため、環状はく皮展示ほを設置し、樹勢調節技術の確立に努めました。

○成果

JA直轄で栽培面積がやや減少したものの、JAふくおか嘉穂で2ha増加し、飯塚管内全体の面積は8.4haと拡大しました。

施設栽培面積は92a増加し、168aとなりました。

環状はく皮により、成品化率が16%向上しました。



写真1 結果枝基部を環状はく皮

○今後の取り組み

今後も、栽培面積の拡大や施設化の推進を図り、生産者の所得向上を目指すとともに、産地ブランドとして高品質な果実を生産できるよう、技術確立に取り組んでいきます。

(8) 未来にのこそう「筑穂牛」

～筑穂牛のブランド強化と産地維持～

○背景

近年の飼料価格と素牛相場の上昇を受け、肥育農家の所得確保が困難になっていました。JAふくおか嘉穂筑穂支所肥育牛部会では、博多和牛を支える地域ブランド牛肉「筑穂牛」の枝肉品質向上と販売促進、今後の産地維持のため、第三者経営継承を念頭においた後継者確保の仕組みづくりに取り組みました。

○対象概況

JAふくおか嘉穂筑穂支所肥育牛部会 4戸

○活動内容

「筑穂牛」の販売強化と産地維持を目的として筑穂牛販売促進協議会（筑穂支所肥育牛部会、飯塚市JAふくおか嘉穂、筑穂牛ファンクラブ、流通業者、普及センター）を設置し、販売・PR戦略の検討と共有化を図りました。また、枝肉品質の向上のため、飼料給与体系の改善と巡回指導を行いました。産地維持のため後継者確保検討会を開催しました。

○成果

販売促進協議会の活動を通して生産者および関係者が、“生産者による直売”という販売戦略を共有し、一体的で効率的なPR活動が行えるようになりました。筑穂牛をよりPRするために筑穂牛コロッケ等の加工品を開発して販売したところ、好評を得て完売することができました。飼料給与体系の改善により枝肉成績（肉質等級4等級以上の割合）が18%向上しました。また、後継者の確保を肥育牛部会として対応する合意形成ができ、福岡市で開催された就農相談会に参加しました。



写真1 筑穂牛コロッケの販売



写真2 就農相談会の様子

○今後の取り組み

更なる筑穂牛の枝肉品質の向上と販売促進による生産者所得の確保、将来を見据えた後継者確保対策を支援していきます。

(9) トピックス

ア 新規就農者等の推移（平成 24 年度以降）

次世代を担う新たな就農者の確保・定着のため関係機関と連携し就農環境の整備を行うなど多面的な支援を行っています。平成 24 年に作成した「新規就農支援プログラム」を基に、各市町にあった支援プログラム実践を支援し、担い手確保や就農定着に向けた取組みを推進しています。

表 1 平成 24 年度以降の新規就農者等一覧表（H27 年 12 月末）

地域	就農相談件数				新規就農者数				県農業大学校進学者数			
	H24	H25	H26	H27	H24	H25	H26	H27	H24	H25	H26	H27
直方市	7	3	3	2	2(1)	1(1)	1(1)	3(2)	1			
宮若市	4	2	1	1	2(2)	3	1(1)		1			1
小竹町			1	1	1(1)			1(1)				1
鞍手町	1					2					1	
飯塚市	19	10	17	8	3	4	6(3)	4(3)	2	4	5	2
嘉麻市	7	5	4	6	2(2)	3(2)	5(2)	2(1)	3	1		1
桂川町			2		2(2)	2(2)						
その他	6	13	5	6								
合計	44	33	33	24	12(8)	15(5)	13(7)	10(7)	7	5	6	5

※(): 青年就農給付金(開始型)受給者

○今後の取り組み

担い手候補の農業関係高校生や農業大学校生を対象に農業セミナー、就農相談等を行い農業の魅力発見や就農への誘導を推進します。また、就農 1～3 年目の新規就農者を対象に営農講座等を開催し早期の定着をめざします。



イ 腐敗病の発生が少ないブロッコリー新品種の導入

JAふくおか嘉穂管内は内陸部にあり、冬期の凍霜害を主因とするブロッコリー花蕾腐敗病の発生が多く、収量向上の阻害要因となっています。着蕾位置が低く形状的に凍霜害の影響を受けにくい新品種「むつみ」「ともえ」を花蕾腐敗病の発生が多い厳寒期（1～2月）に作付推進したことが要因となり、1戸当たりの作付面積が25%増加し、ブロッコリー部会全体で作付面積が15ha増加しました。

中晩生の作型割合が増えたことにより、早生作型に偏っていた作型構成が改善され、市場ニーズが高い厳寒期の出荷量を増やすことで、収量アップと販売金額の増加が期待されます。

○今後の取り組み

ブロッコリーはJAふくおか嘉穂の特別振興品目として位置付けられ、作付拡大が期待されます。新たな作型（初夏出し）を検討し、産地拡大・長期出荷体制の構築を図ります。

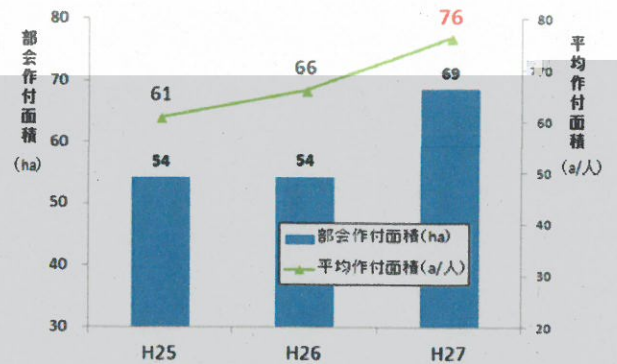


図1 部会作付面積と1戸当たり作付面積の推移

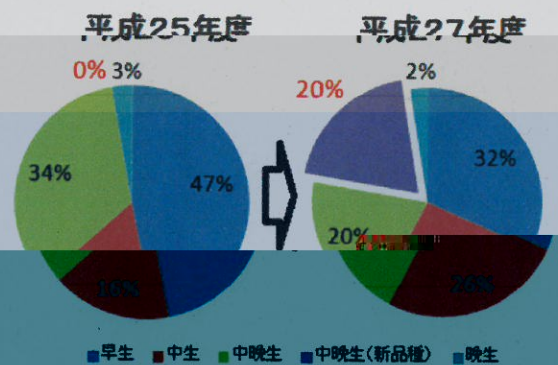


図2 作型別割合の比較

ウ 花き日持ち性向上対策認証制度が本格スタート

生産、流通、小売がひとつになって、「元気な花」を消費者に届ける「日持ち性向上対策品質管理認証制度」が平成26年10月から始まりました。

当制度により、生産者段階では「適切な鮮度保持剤の使用」や「適切な選花場の管理」など花の日持ちを向上させる様々な対策に取り組むことが求められます。

普及指導センターは、鮮度保持に関する研修会や鮮度保持剤の試験などを行い、花の日持ちを向上させる対策を支援し、すでに10戸が品質管理認証を取得しています。認証取得した生産者は、出荷箱に認証マークを印字するなどして日持ち性向上への取り組みをPRし、販売強化に取り組んでいます。



写真1 審査員による現地調査



図1 生産部門認証マーク

○今後の取り組み

さらに多くの生産者が品質管理意識を高め、認証を取得することを支援します。

エ 大豆の狭畦密植栽培で収量向上

大豆栽培では梅雨明けの遅れなどにより播種が遅延した際、生育量確保のために株間を狭め播種量を増やす方法が一般的です。しかし、播種量の調整には限界があり、雑草発生等の問題があります。このため、普及指導センターでは遅播き技術として図1のとおり冬間を標準の約半分に狭めた狭畦密植栽培の普及を図っています。条間を狭めますが株間を広げることで十分な生育空間が確保され、大豆の茎葉が早くから地表面を覆い、抑草効果も見られ、遅播きでも一定量の収量が確保できます。全体的に播種作業が遅れた昨年年度において、直轄地域で本技術を導入した農家の平均収量は慣行栽培農家と比較し、20%程度上回りました(図2)。本年も狭畦密植栽培の大豆の生育は順調で、大きな倒伏も見られませんでした。

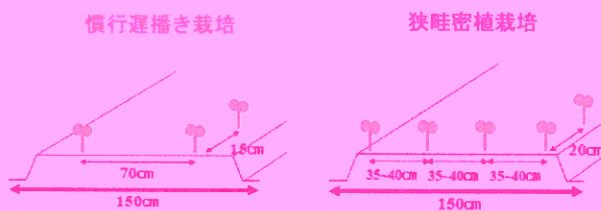


図1 狭畦密植栽培のイメージ図

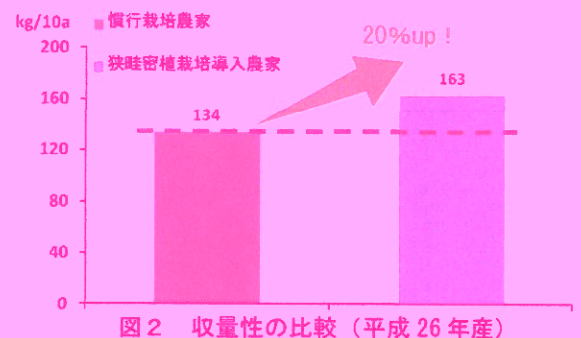


図2 収量性の比較 (平成26年産)

○今後の取り組み

大豆作付農家・営農組織に対し、JAと連携し当技術の普及拡大を図ります。

オ フジコナカイガラムシ防除適期の把握

カキの重要害虫であるフジコナカイガラムシは、果実の火ぶくれやす病、軟果を引き起こす厄介ものです。薬剤防除が基本ですが、成虫になるとロウ物質に覆われて薬効が劣るため、孵化後の幼虫時期に防除を行う必要があります。

この幼虫発生期を把握するための方法として、フェロモントラップによる雄成虫の捕獲を行いました。雄成虫の発生ピークから約1か月後が孵化幼虫の発生ピークとなり、防除適期となります。この情報をカキ部会員に伝えることで、適期に防除ができました。



写真1 フジコナカイガラムシ雄成虫トラップ

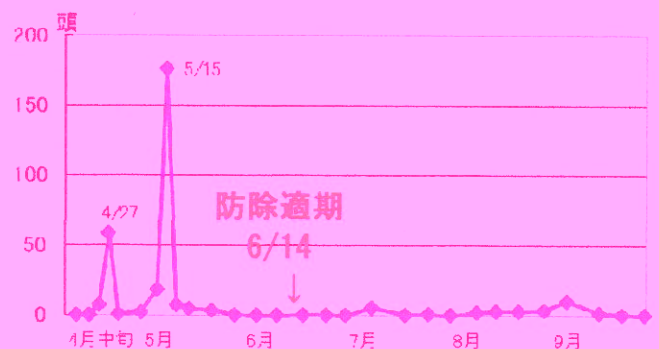


図1 フジコナカイガラムシ雄成虫誘殺数の推移

○今後の取り組み

フジコナカイガラムシの発生時期は年ごとの気温により変動するため、調査を継続し、防除適期の情報を提供していきます。

(10) 各種表彰（国・県）

やすだ いっぺい
宮若市 安田 一平 氏

全国青年農業者会議で農林水産大臣賞を受賞！

平成 28 年 3 月に東京都で開催された「第 55 回全国青年農業者会議」において、九州・沖縄ブロック代表として宮若市の安田一平氏が「農業×デザイン～魅力ある産業確立プロジェクト～」のテーマでプロジェクト発表を行い、農林水産大臣賞（園芸・特産部門）を受賞されました。発表内容はプロダクト、マーケティングの 2 つの視点から現状分析を行い、魅力ある農業の確立に向けて取り組んでいくというものです。企業の観点から現状分析を明確に行い、経営改善が図られていることが高く評価されました。



安田一平氏（左から3人目）、直轄4HCの仲間

あが へいすけ
嘉麻市 福澤農園株式会社 古賀 恵美子 氏

排水対策の徹底で高い産収量を実現！ 全国表彰大

ました。

やすこうち とよたか
宮若市 安河内 豊孝 氏

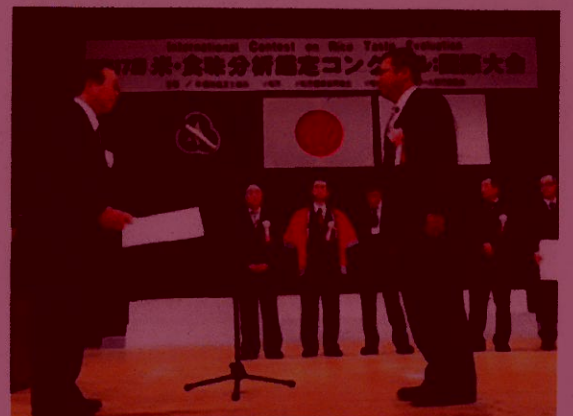
米・食味分析鑑定コンクールで金賞受賞！

第 17 回「米・食味分析鑑定コンクール国際大会」で、宮若市の安河内豊孝氏が出品総数 5, 119 点の中から 14 点の金賞に入賞しました。

安河内氏は、水稻、麦の大規模経営を行う認定農業者で、米は品種やほ場、乾燥機毎に食味値を測定し良質米生産に努め、福岡県エコ農産物認証を取得する等米のブランド化に努めています。



右：代表取締役古賀恵美子氏、左：福澤英一氏（父）



石川県小松市での受賞式

嘉麻市 ^{きつき} 木附 ^{ひとし} 一士 氏 直方市 ^{こんどう} 近藤 ^{しんご} 慎吾 氏

第 20 回福岡県農林水産まつり優秀賞を受賞！

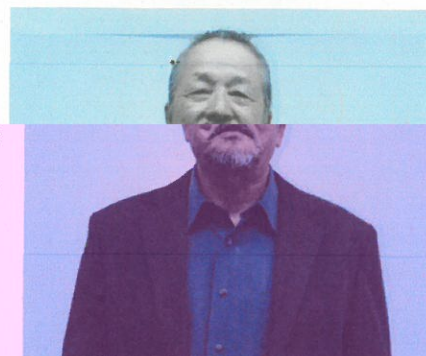
「福岡県農林水産まつり」で嘉麻市の木附一士氏と直方市の近藤慎吾氏が農林水産賞の「農産部門」と「園芸部門」で優秀賞を受賞されました。

木附氏は JA ふくおか嘉穂特別栽培米部会長を歴任し、平成 26 年度には県内一の特別栽培米産地に育てる等、集団の指導者として福岡県農業の発展に貢献されたことが高く評価されました。

近藤氏は有限会社を設立し、都市近郊農業の特性を活かして、キャベツの契約栽培やアスパラガス等の施設野菜の周年生産を行い、雇用型経営を実践されています。また、直方市認定農業者連絡協議会会長に就任し、担い手育成等福岡県農業への貢献が高く評価されました。



木附一士氏



近藤慎吾氏

嘉麻市 ^{つじ} 辻 ^{りょうた} 諒太 氏 飯塚市 ^{おかまつ} 岡松 ^{ゆうき} 侑希 氏

福岡県青年農業者会議で優秀賞、優良賞を受賞！

1月に行われた「平成 27 年度福岡県青年農業者会議」の意見発表の部で嘉麻市の辻諒太氏が優秀賞、プロジェクト発表の部で飯塚市の岡松侑希氏が優良賞を受賞しました。

辻氏は、「養蜂家としてのこれまでの歩みと今後の目標」のテーマで意見発表を行い、就農前と就農後のしっかりとした歩みと今後の明確な目標と計画が高く評価されました。

岡松氏は、「二つの目標」と題して、就農当時から抱く、雇用の導入と就農の手助けという二つの目標を実践してきた成果を発表し、その実行力や地域貢献などの点が高く評価されました。



左：辻諒太氏 右：岡松侑希氏

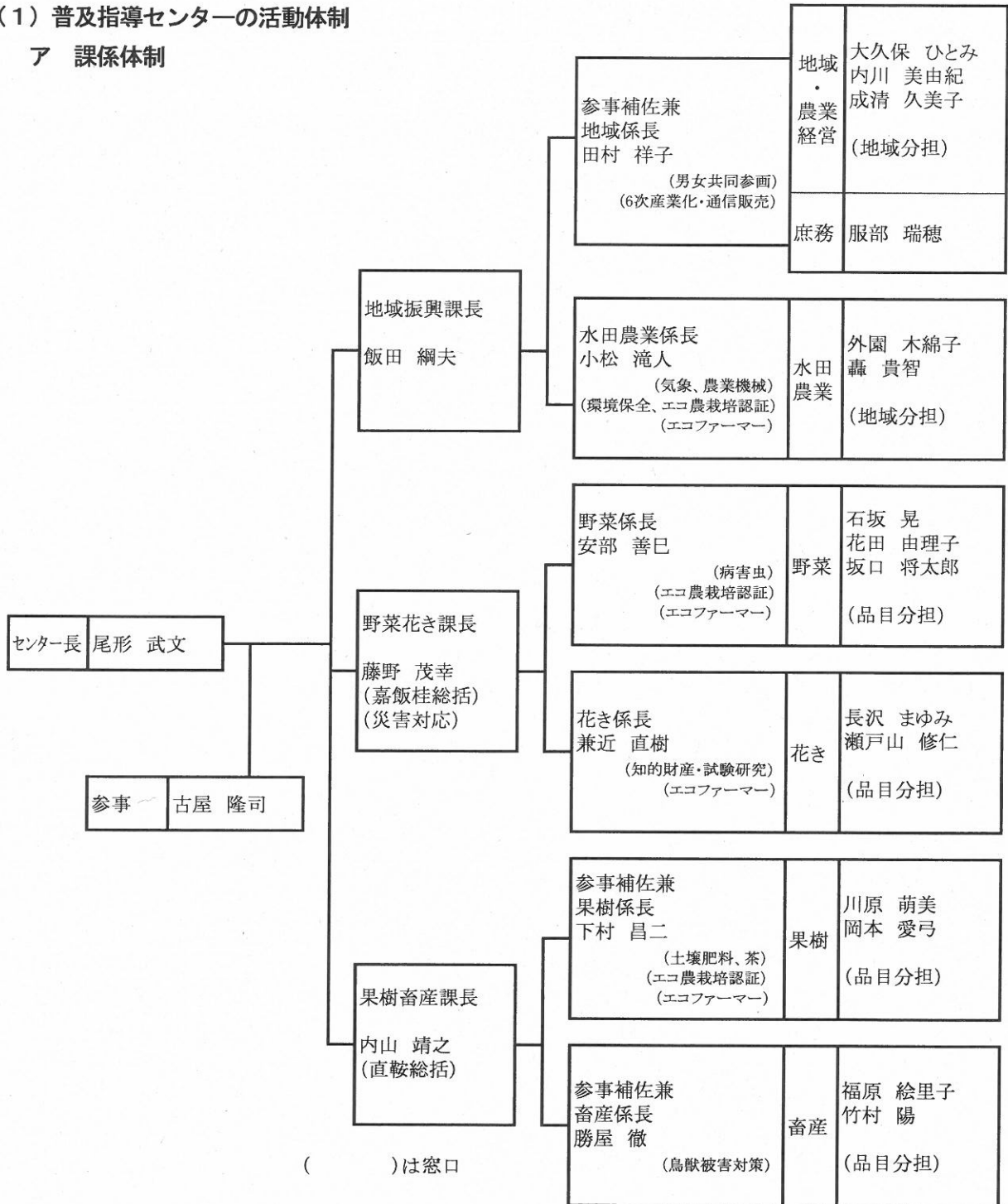
各種表彰(国・県)一覧

表彰事業名	受賞者	受賞内容	市町名
平成 27 年度全国青年農業者会議	安田 一平	農林水産大臣賞 「農業×デザイン～魅力ある産業確立プロジェクト～」	宮若市
平成 27 年度九州・沖縄青年農業者会議		最優秀賞(九州農政局長賞) 「同上」	
平成 27 年度全国麦作共励会	福澤農園 株式会社	全国米麦改良協会会長賞	嘉麻市
第 17 回米・食味分析鑑定コンクール 国際大会	安河内 豊孝	金賞	宮若市
第 20 回福岡県農林水産まつり	木附 一士 近藤 慎吾	優秀賞(農産部門) 優秀賞(園芸部門)	嘉麻市 直方市
平成 27 年度福岡県花き品評会			
「産物の部」	樋口 信弘	福岡県知事賞 キク「バルカ」	桂川町
	久家 功	福岡県知事賞 ダリア「かまくら」	嘉麻市
	小山 修一	福岡県花き市場協議会長賞 スカビオサ「グラマラスラベンダー」	嘉麻市
	樋口 智世	福岡県花き園芸連合会長賞 キク「ロサーノ」	桂川町
	小山 修一	審査員特別賞 ガーベラ「ヒマワリ」	嘉麻市
「技術・ほ場の部」			
トルコギキョウ	貞光 孝宏	福岡県知事賞「レイナホワイト」	直方市
夏秋咲ギク(露地部門)	村瀬 弘	花あふれるふくおか推進協議会長賞 「精吟」	飯塚市
	山本 一則	日本花き生産協会会長賞「精やさか」	飯塚市
夏秋咲ギク(施設部門)	豊田 武	全国農業協同組合連合会福岡県 本部長賞「夏日和」	嘉麻市
平成 27 年度福岡県青年農業者会議			
「意見発表」	辻 諒太	優秀賞「養蜂家としてのこれまでの歩 みと今後の目標」	嘉麻市
「プロジェクト発表」	岡松 侑希	優良賞「二つの目標」	飯塚市
第 14 回福岡県男女共同参画表彰	畠中 五恵子	「女性の先駆的活動部門」受賞	飯塚市
第 9 回ふくおか良質堆肥コンクール	農事組合法人 穂坂牧場	金賞	飯塚市
第 51 回福岡県肉畜共進会「交雑種の部」	武田 英文	金賞	田川市
第 44 回西日本地区豚枝肉共進会	柏木 悟	金賞(九州農政局長賞) (福岡県知事賞) (福岡市長賞)	赤村

4 参考資料

(1) 普及指導センターの活動体制

ア 課係体制



イ 班活動の体制

(ア) センター内運営事項による分掌 (推進班)

水田農業経営力強化推進班、経営体育成推進班

担い手育成推進班、情報活用推進班、安全安心な農畜産物推進班

(イ) 地域班

嘉飯桂地域班、直鞍地域班

(2) 現地実証・展示ほ一覧

No.	品目	課題名	結果の概要	場所
1	水稲	「元気つくし」の特A米づくり	米の食味ランキングでの特Aクラスの食味評価を得るための試験。施肥量を慣行より抑え、良食味地帯である宮若市脇田、下、嘉麻市枝国に実証ほを設置。日本穀物検定協会の食味試験では、基準米を上回る評価となり、特に宮若市下地区の評価値が高くなった。収量は慣行栽培と同等となった。	宮若市 嘉麻市
2		「夢つくし」クラスの新品種「ちくし91号」の現地適応性試験	高温耐性を有する極早生系統の現地適応試験。ちくし91号は、夢つくしと比較して、いもち病の発生程度は低く、稈長が短く倒伏耐性は優れ、成熟期は1日程度遅かった。収量性は同等で、食味はちくし91号がやや優れていた。今後も継続して検討を行う。	直方市
3		スクミリンゴガイに対する防除効果検討	農業カウントされない天然物由来成分(リン酸第二鉄)によるスクミリンゴガイ駆除剤の効果を検証。従来の剤と比較して駆除効果に差はなかった。	飯塚市
4		「元気つくし」における土壌改良資材投入による倒伏軽減及びいもち病軽減効果の検証	3種類の土壌改良資材について倒伏といもち病軽減効果を検証した。本年度は多雨、日照不足により、いもち病の発生が多くなったことから効果の差は判然としなかった。継続検討。	宮若市 嘉麻市
5		特別栽培米品質向上に向けた施肥体系の検討	近年、充実不足による検査等級低下が見られるために、基肥の施肥量を減じて、穂肥の施肥量を増加する試験。基肥を減肥しても穂数は確保され、穂肥の増加により充実不足も解消される結果となった。平成28年度暦から結果を反映する。	嘉麻市
6		早期「コシヒカリ」、「夢つくし」の疎植栽培	早期コシヒカリ及び普通期夢つくしにおいて坪当たり42株植を検討。坪当たり42株植とすることで、10a当たりの育苗箱数が3割程度削減でき、収量、品質とも慣行栽培(坪当たり60株植)と差は見られなかった。単年度試験のため継続検討。	飯塚市 鞍手町
7		「夢つくし」の密播疎植栽培	普通期夢つくしにおいて、育苗箱数を削減し、播種量を増加した育苗期の病害の発生状況や苗質に大きな差は見られなかった。出穂、成熟期は試験区が1日程度遅れた。試験区はいもち病が多かったことから結果は判然としなかった。省力、低コスト技術のため継続検討。	鞍手町
8		「夢一献」(酒米)の鶏ふんを用いた栽培	契約栽培の夢一献について鶏ふんを利用した栽培技術を検討した。基肥に、化成肥料と鶏ふんを使用した。両区とも収量は確保され、品質の差も見られなかった。単年度試験のため継続検討。	飯塚市
9		水稲汚損防止のための稲こうじ防除対策の検討	モンガリット粒剤の施用時期(田植え直後or出穂前処理)及びボルドー剤との効果検討を行った。モンガリットの稲こうじ病に対する効果は、田植え直後より出穂前処理の効果が高かった。ボルドー剤の効果は高かったが、収量に影響のない葉の葉害が見られた。採種及び飼料用米等の暦に反映する。	宮若市 飯塚市
10		飼料用米(ミズホチカラ)の緩効性肥料による1回全量施肥の検証	飼料用米専用に開発された基肥一発肥料2種類の試験。既存の肥料と比較し、緩効性肥料が生育初期から後半にかけて、持続的に溶出する肥料となっている。いずれの資材も収量性は高くなった。年次間差も含め、試験の継続・検討を行う。	飯塚市
11		飼料用米(ミズホチカラ)の玄米タンパク質含有率向上技術の確立	実需者がミズホチカラの玄米タンパク質向上を望むため、実肥施用効果と緩効性追肥を穂肥の2回目に施用する試験を実施した。緩効性追肥肥料を2回目に施用する区が充実がよく収量も高くなった。実肥施用区の収量向上効果は見られなかった。玄米タンパク質含有率については明確な差が見られなかった。面積拡大に伴う品質向上が必要ため継続検討。	飯塚市
12		大豆	「フユタカ」より早播き適性があり、早生の県育成品種の現地適応試験。本年は降雨が多く、播種遅れや降雨によるラブリット試験の妨げによる生育不良、台風による倒伏や葉の裂傷があり「ちくし豆5号」の収量が低く、品種特性の把握はできなかった。継続検討を行う。	飯塚市
13		狭畦密植栽培における適正播種量の検討	大豆の晩播対策として有効な狭畦密植栽培での適正な播種量を検討した。7月27日播種の狭畦密植栽培において播種量を7、9、11kg/10aの区を設定した。9kg/10a播種区の着実数が多く、収量が高くなった。品質、倒伏に大きな差はなかった。平成28年度栽培歴に反映する。	鞍手町
14		狭畦密植における雑草防除対策の検討	狭畦密植栽培では、条間を縮めるため中耕・培土が実施できず雑草の多発が懸念される。このため、初期除草剤の種類と中期除草剤使用の効果について確認した。初期除草剤にフルミオWDGを混用し、ポルトフロアブルと大豆バサグランを中期に使用した区の雑草発生量が最も少なくなった。結果を基本として、ほ場ごとの雑草発生状況に応じた除草体系を実施する必要がある。	小竹町
15		狭畦密植における部分浅耕及びアップカッターを利用した一工程播種法の検討	狭畦密植と一工程播種を組み合わせることにより省力化をめざす。麦後作において、部分浅耕及びアップカッターのいずれかを使用すると前耕起、播種の二工程播種の半分の時間で播種が終了し、収量、品質にも差は見られなかった。事前に非選択性除草剤の散布を実施していれば雑草も問題とはならず、播種期間短縮が見込まれ、収量確保と規模拡大にも有効である。今後技術の紹介、推進を行う。	宮若市 鞍手町

No.	品目	課題名	結果の概要	場所
16	麦	「ちくしW2号」の緩効性肥料による追肥の省力化	追肥一発肥料を利用した穂揃期施肥量(25kg/10a→15kg/10a)の軽減試験。試験区は、対照区(3回追肥)と比較し、穂数が減少して収量が低くなった。タンパク質含有率は同等であった。	鞍手町
17		「ちくしW2号」とチクゴイズミの比較	「チクゴイズミ」栽培地帯での導入に向けた試験を実施した。「ちくしW2号」は「チクゴイズミ」に比べて成熟期が2日遅く、穂数が少なく収量は低くなった。「ちくしW2号」はタンパク質含有率向上のため穂揃期追肥が必要なことから、労力等を含めて検討する必要がある。	嘉麻市
18		「チクゴイズミ」の緩効性肥料による追肥の省力化	追肥一発肥料の現地試験。対照区(分施肥体系)と比較し、収量、タンパク質含有率ともに、高くなっており有望である。価格が高いため人件費を多く要する集落営農組織での実用性は高い。	嘉麻市
19		大麦「はるしずく」の緩効性肥料による追肥の省力化	基肥一発肥料の現地試験。対照区(分施肥体系)と比較し、収量はやや高く、品質は同等となった。価格が高いため人件費を多く要する集落営農組織での実用性は高い。	飯塚市
20	野菜	イチゴの萎黄病防除の確立	イチゴの土壤消毒剤としてのクロルピクリン3剤(フロー剤、錠剤、液剤)の効果は高く、土壤中のフザリウム密度は0に抑えられ、土壤消毒後の萎黄病は発生していない。	飯塚市
21		アスパラガスのかん水方法の違いが土壤水分分布に及ぼす影響について	5~6月では散水チューブによるかん水は畝内の土壤水分が均一に分布していたのに対し、点滴チューブでは畝の端の土壤水分が低めになった。また、点滴は散水より1回当たりのかん水量が少なく多回数のかん水が必要であることが示唆された。	飯塚市
22		ブロッコリー組織内ベト病の効果的防除方法の確立	9月20日定植のブロッコリー(品種名:「むつみ」)において、フオリオゴールドを11月中旬又は下旬に散布することで、花蕾に発生する組織内ベト病を抑えたことから、11月期の葉に発生するベト病防除を行うことで花蕾に発生する病害を予防する効果を確認できた。	嘉麻市
23		紙ポットを用いたオクラの移植栽培の検討	そのまま定植可能な紙ポットの利用について検討を行ったが、地温の上昇が抑えられ、発芽率の低下及び初期生育の遅れが見られた。温床の利用等、地温を確保する工夫が必要と思われる。	飯塚市
24		イチゴにおけるハダニ類に対する炭酸ガス濃度60%の防除効果	定植直前の苗をCO ₂ 濃度60%に維持した環境で24時間処理することにより、苗に寄生していたハダニ類を死滅させることができた。また、葉害の発生は見られなかった。	直方市
25		イチゴにおけるCO ₂ 日中施用の検討	CO ₂ を2時間おき(9、11、13時)に15分ずつ施用することで、換気が不十分な日でも、ハウス内のCO ₂ 濃度を外気並みに維持できることが確認された。生育及び収量に対する影響については、現在も調査を継続中。	直方市
26		ブロッコリーの10月出しに適する品種検討	品種「玉麟」は、慣行品種「スピードドーム052」と比較して、5日程度収穫初期は遅れるものの、花蕾重が重く、日持ち性に優れ、不成形花蕾が少ないことから、10月出しに適すると考えられた。	鞍手町
27		トマトにおけるCO ₂ 日中施用の検討	CO ₂ を9~16時に500ppm程度で濃度制御することで、ハウス内のCO ₂ 濃度を無施用ハウスより100ppm程度高く維持できることが確認された。生育及び収量に対する影響については、現在も調査を継続中。	嘉麻市
28	花き	大苗利用による冬春出しトルコギキョウの開花促進技術の実証	大苗(288穴、葉齢2.5~3.0)の利用により、慣行苗(406穴、葉齢2.0)に比べ、早期活着が促され年内までに出荷蕾の発着が確実となることが分かった。3月出荷技術として技術の普及を図る。	嘉麻市
29		ダリアの球根由来親株による採穂技術の確立	ダリアの球根を元親株として利用する場合、2月下旬に球根を定植し、3月中旬に摘心することで球根からの採穂が確実となり、十分量の採穂が可能となることが分かった。	嘉麻市
30		キクの温湯消毒による白さび病対策	キク挿し穂の温湯消毒による白さび病対策について実証を行った。本年は、実証区、対象区とも白さび病の発生が少なく明確な差は認められなかった。温湯に対する挿し穂の障害は無かった。	飯塚市 宮若市
31	長期冷蔵処理によるシンテッポウユリの9月出荷の検討	シンテッポウユリ切り花の冷蔵温度および冷蔵期間について検討した。3℃で2週間であれば、開花はやや早まるが、概ね問題ないことが分かった。冷蔵中に病気の発生が多く、改善が必要である。	飯塚市	
32	トルコギキョウにおける輸送中の品質低下対策	トルコギキョウの品質低下対策として鮮度保持剤の使用および予冷の有無を検討した。鮮度保持剤により日持ち期間は大幅に伸びた。予冷により輸送中の出荷箱内温度は低下したが、灰色カビ病の改善にはならなかった。	直方市 宮若市	
33		「とよみつひめ」果実品質向上対策	側枝単位の環状はく皮により品質向上効果が見られた。併せて、成熟異常	

(3) 現地活動情報一覧

No.	コンテント	発行月日	執筆者
1	消費者が満足する花きの品質管理を目指して！ ～JA直轄若宮花倶楽部が日持ち性向上対策品質管理認証を取得～	4月13日	瀬戸山
2	土地利用型生産組織で高菜の収穫が始まる ～組合員が一致団結！高菜栽培に取り組む～	4月16日	安部
3	宮若特産シャクヤクの出荷が始まりました！ ～JA直轄シャクヤク部会、順調に出荷中～	5月13日	長沢
4	新戦力加入！若い力でより活発な活動を！ ～新規会員5名を迎え、嘉穂4Hクラブ総会開催～	5月18日	瀬戸山
5	地域農業の発展に向け、認定農業者が一致団結！ ～認定農業者協議会総会が各地で開催～	6月 8日	田村
6	“ブドウ生産の達人”に!!!おれはなるっ!!! ～若手ブドウ生産者を対象に、栽培管理基礎勉強会を開催～	6月15日	岡本
7	活動の更なる発展にむけ、指導農業士が一致団結 ～筑豊地区指導農業士会研修会・総会開催～	7月 6日	田村
8	若手女性農業者のための能力向上を目指して ～経営ビジョン策定研修開講式を開催～	7月 7日	大久保
9	農事組合法人ひかりファーム若宮が設立 ～地域の水田農業を担う経営体を目指して～	7月 8日	轟
10	大豆収量upを目指して!! ～大豆栽培講習会を開催～	7月 8日	轟
11	トンネル栽培の拡大で6月出荷量が約50%アップ！ ～オクラ生産者の所得向上への取り組み～	7月17日	坂口
12	酪農家の所得向上めざし繁殖改善に取り組む ～農家・関係機関・組織が一致協力～	7月21日	勝屋
13	営農基礎講座「知っていますか？土づくりの基礎」を開催 ～栽培基礎技術の取得と仲間づくりのきっかけに～	7月24日	内川
14	直売所の美味しいみかん生産に向けて ～カンキツ類の摘果作業～	7月24日	内山
15	目指せ、イチゴ萎黄病の撲滅!! ～イチゴ萎黄病対策現地研修会を開催～	7月31日	花田
16	自給粗飼料の生産性向上を目指して ～遠賀川河川敷利用者協議会研修会～	8月10日	勝屋
17	これでバッチリ！儲かる酪農 ～県北地域乳用牛群改良検定組合研修会～	8月17日	勝屋
18	夏の暑さにも負けず直売野菜の生産を拡大 ～ドリームホープ若宮で野菜講習会を開催～	8月17日	石坂
19	管内の優良畜産たい肥を集めて審査会を開催 ～第9回ふくおか良質たい肥コンクール地域審査開催～	8月21日	福原
20	高校生の就農・就業支援に向けて ～管内農業関係高校と普及指導センターの情報交換会を実施～	8月24日	内川
21	我が家の経営を見直し、ステップアップ！ ～経営管理講座の開催～	9月 3日	成清
22	台風15号 果樹中心に大きな被害発生！ ～営農復旧に向けて普及活動開始～	9月17日	藤野

No.	タイトル	発行月日	執筆者
23	祝、九州制覇！次は全国の舞台で！ ～九州・沖縄地区青年農業者会議で最優秀賞を受賞～	9月16日	坂口
24	集落営農組織の法人化及び効率的経営について学ぶ ～集落営農組織視察研修会を開催～	10月24日	小松
25	高校生に農業の魅力を発信！ ～飯塚地区高校生農業セミナーを開催～	10月30日	内川
26	ナシ紋羽病治療の新技術 ～温水点滴処理機を活用した温水治療技術～	11月6日	下村
27	安全で適正な農薬使用指導体制をリフレッシュ ～嘉穂地域農薬安全使用対策協議会活動の充実強化～	11月17日	藤野
28	土壌病害をシャットアウト ～筑豊花き生産者連協議会が技術研修会を開催～	12月3日	兼近
29	飯塚特産「庄内フキ」の出荷スタート！ ～生育良く出荷順調～	12月16日	花田
30	経営ビジョンを作成して我が家の農業経営改善を図ろう ～女性農業者を対象に農業経営計画とライフプランの作成研修を実施～	12月21日	大久保
31	園芸農業における企業の経営を目指して ～社長講座を開催～	12月21日	成清
32	ナシの冬季管理を学ぶ！ ～営農基礎講座（果樹）ナシせん定勉強会～	1月27日	川原
33	農業青年の主張でダブル受賞！ ～嘉穂4Hクラブ員が意見・活動成果発表会で高評価～	1月29日	川原
34	新たな戦略作物として飼料用米の取り組みが活性化 ～管内平均収量607kg/10aを達成～	2月1日	外園
35	農業ICTによる効率的な農業経営について学ぶ ～土地利用型個別大規模経営者研修会を開催～	2月15日	小松
36	ナシ黒星病防除には落葉処理から ～普及指導センターで実証試験開始～	2月17日	下村
37	米・食味分析鑑定コンクールで金賞受賞！ ～宮若市安河内農業者氏のお米が高評価を得る～	2月17日	小松

(4) 普及指導員調査研究一覧

(○印は、主担当者)

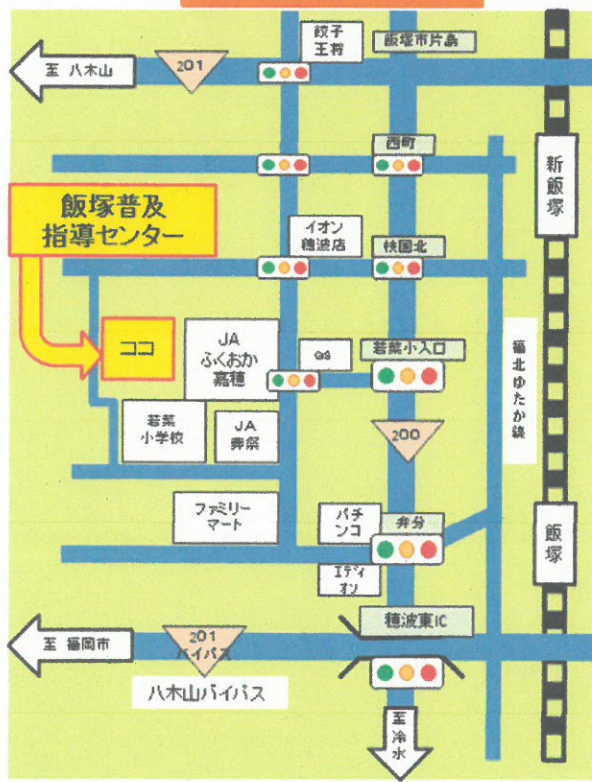
No.	課題名	概要	部門	担当者
1	次世代の農業を担う女性農業者の就農実態把握と支援方策の検討	各 JA 青年部の調査から、配偶者の 46%が農業に従事しており、配偶者の研修について、生産技術、農業経営、機械研修など多岐にわたりパートナーとして活躍できる研修が望まれていることがわかった。今後行う研修会等に活用する。	地域	○大久保 田村 内川 成清
2	大豆狭畔密植栽培における技術体系の確立	狭畦密植栽培での播種密度は 20 本/m ² 程度が適当であり、除草対策は、播種直後と中期剤の散布で対応できる。 また、部分浅耕やアップカッターロータリーでの一工程播種でも収量は確保され、二工程播種に比べて作業時間は約半分となり省力化できる。	水田 農業	○轟 小松 外園
3	イチゴの萎黄病防除	イチゴの土壌消毒剤としてのクロルピクリン3剤(フロー剤、錠剤、液剤)の効果は高く、土壌中のフザリウム密度は0に抑えられ、土壌消毒後の萎黄病は発生していない。	野菜	花田
4	アスパラガスのかん水方法の違いが土壌水分分布に及ぼす影響について	5～6月では散水チューブによるかん水は畝内の土壌水分が均一に分布していたのに対し、点滴チューブでは畝の端の土壌水分が低めになった。また、点滴は散水より1回当たりのかん水量が少なく多回数のかん水が必要である。		石坂
5	ブロッコリー組織内べと病の効率的防除方法の確立	9月20日定植のブロッコリー(品種名:むつみ)において、フォリオゴールドを11月中旬又は下旬に散布することで、花蕾に発生する組織内べと病を抑えた。		安部
6	冬春出しトルコギキョウ安定生産技術の検討	本葉2～3節展開した大苗を定植することで、年内に確実に発蕾させ、3月中旬から安定して生産できる冬春出し栽培技術を実証した。	花き	○長沢 兼近
7	シンテッポウユリの切り花冷蔵処理の検討	3℃で2週間であれば、開花はやや早まるが、概ね問題ないことが実証できた。ただし、冷蔵中に病気の発生が多く、改善が必要である。		瀬戸山
8	「秋王」の結実安定技術について	満開10日後のジベレリン200ppm散布により結実促進効果が見られた。主枝部の環状はく皮は判然とした効果が見られなかった。	果樹	下村
9	「とよみへろしゆり」の果実品質向上対策について	側枝単位の環状はく皮により品質向上効果が見られた。併せて、成熟異常果の発生を軽減することができた。		岡本
10	トレハロース給与による乳房炎予防効果の検討	トレハロース給与により、分娩後の体細胞数は低下する傾向は見られたが乳房炎予防効果を確認するには至らなかった。	畜産	勝屋
11	コントラクター組織に関する意向調査	コントラクター組織設立の意向について全戸調査を行った結果、68%の農家に組織利用の意向があることが明らかとなった。		福原
12	和牛肥育前期飼料の変更が増体に及ぼす影響について	肥育前期の増給速度を変更したところ、前期および中期の増体に変化はなかった。		竹村

(5) 飯塚地域担い手・産地育成総合支援協議会活動実績

部会	課題・計画	成果・実績	
担い手育成	交流研修大会等の実施	集落営農組織の運営管理向上を目的に視察研修を、個別大規模農家の経営発展を目的に研修会を実施した。	
	新規就農者確保のための農業関係高校セミナー実施	嘉穂総合高校、鞍手龍徳高校生徒を対象に生産ほ場や先進農家等を視察・実習を行い農業の理解を促進した。	
	若い農業者育成のための経営改善研修会や営農基礎講座実施	新規就農者を中心に、共通講座と部門別（5部門）コースでの勉強会を実施した。	
農業経営指導	研修会、講座等開催による経営管理能力向上支援	経営管理講座（初級・中級コース）を開催し、簿記の基礎や経営分析手法の習得支援を実施した。	
	雇用型経営管理支援	重点支援農家に対して、カウンセリング・コンサルテーションを通じた技術・経営改善支援を実施した。	
	社長講座の開催	認定農業者のモデルとなる経営者の育成と法人経営設立に向け、経営者に必要な専門的講座を開催した。	
普及班	「とよみつひめ」の新規栽培者確保、栽培技術の確立	「とよみつひめ」は展示場を設置し、いぼ病防除対策の確立を図った。「夢のふじ」は登熟向上のため極端な早植えの抑制を啓発した。	
	麦・大豆の収量向上技術の確立と作付拡大	麦は排水対策を基本とした栽培技術を推進した。大豆は梅雨期における適期播種・遅播き技術の普及を図った。	
	排水対策による麦・大豆の生産性向上	排水対策のためのほ場整備事業に対する現地の要望把握と事業要件達成のための支援を関係機関と実施した。	
生産振興	野菜係	振興品目の生産拡大	アスパラガスは適正なかん水方法を検討した。オクラは早期出荷のための移植栽培を検討した。
		収量・品質向上、安定出荷のための生産改善	各品目の安定出荷のため、イチゴの萎黄病、ブロッコリー組織内べと病防除技術の確立を図った。促成トマトは炭酸ガスの日中施用技術の確立を検討した。
	花き班	トルコギキョウの冬春作型の拡大と栽培技術改善	大苗定植による冬春出しトルコギキョウ安定生産技術の確立とトルコギキョウにおける輸送中の品質低下対策を検討した。
		キクの病虫害防除の徹底と計画出荷体制の確立	温湯消毒による白さび病対策やフェロモントラップによるヤガ類適期防除対策の徹底により安定出荷体制の確立を図った。
		シンテッポウユリ、ケイトウの8月出荷の作型分散	シンテッポウユリは短期貯蔵による鮮度保持技術による出荷の分散を、ケイトウは新品種による作型分散を検討した。
	果樹班	「とよみつひめ」の新規栽培者確保、栽培技術の確立	施設栽培で問題となる「とよみつひめ」成熟異常果対策として、側枝単位の環状はく皮効果が確認できた。
カキ単収アップ、「秋王」「太秋」の導入推進		フェロモントラップによるフジコナカイガラムシ適期防除情報を発信し、秋王については、結実安定のためのジベレリン処理の有効性が確認できた。	
畜産班		飼料コスト低減のためのWCS（飼料用イネ）及び河川敷草地での自給飼料生産を推進	河川敷草地におけるイタリアンライグラスの4倍体品種導入により作業適期の拡大を検討。WCSは茎葉型WCS用稲「たちすずか」の栽培・給与技術の確立を検討した。
	飼養管理・乳房炎予防対策の徹底による生乳出荷量の向上	「トレハロース」のもつ抗酸化作用による乳房炎の予防効果を検討した。	



周辺地図



庁舎への交通アクセス

車

八木山バイパス「穂波東IC」より約1.2km
「若菜小学校入口」交差点より約750m

J R

福北ゆたか線飯塚駅または新飯塚駅下車タクシー約10分

西鉄バス

穂波バス停より徒歩約10分
「若菜小学校入口」交差点より約500m

福岡県飯塚農事務所飯塚普及指導センター

〒820-0089 福岡県飯塚市小正 319-1

TEL : (0948) 23-4154

FAX : (0948) 29-4866

E-Mail : iizuka-dlc@pref.fukuoka.lg.jp

HP : <http://www.pref.fukuoka.lg.jp/soshiki/4704804/>

福岡県行政資料

分類番号	所属コード	登録年度	登録番号
PA	4703419	27	0001